

夏季福音特別集会（3）（浅間高原）

愛の本質

――コリント前書第13章4～7節――

1957年8月10日

小池辰雄

隠された半月 エロースとアガペー 愛はゆったりとした気分 神の如くされる 死生の転換
 変質変貌 長幼序あり キリストの憤り キリストの前にぶつ倒れる 愛はすべてを包む 神
 の愛の霊気 キリストと一つなりの世界に入る 祈り

【コリント前13】

4 愛は寛容にして慈悲あり。愛は妬^{ねた}まず、愛は誇らず、^{たかぶ}驕らず、⁵ 非礼を行わず、己の利を求めず、⁶ 憤らず、人の悪を念^{おも}わず、⁷ 不義を喜ばずして、真理の喜ぶところを喜び、⁷ 凡そ事忍び、⁷ おおよそ事信じ、⁷ おおよそ事望み、⁷ おおよそ事耐うるなり。

● 隠された半月

3回目ですね。

4 愛は寛容にして慈悲あり。愛は妬^{ねた}まず、愛は誇らず、^{たかぶ}驕らず、⁵ 非礼を行わず、己の利を求めず、⁶ 憤らず、人の悪を念^{おも}わず、⁷ 不義を喜ばずして、真理^{まこと}の喜ぶところを喜び、⁷ 凡そ事忍び、⁷ おおよそ事信じ、⁷ おおよそ事望み、⁷ おおよそ事耐うるなり。

コリント前書13章は、いうまでもなく愛の讃歌として知られているのでありますが、冷静に客観的にこれを見るときに、キリスト教の

「愛とは何ぞや？」

という問に対して必ずしも名答案とはいえないと思う。パウロが本格的に思索――思索といつてはおかしいですが――祈つて、愛というものを真に闡明^{せんめい}しようと思つたらば、コリント前書13章とはだいぶ違った答案も書くのではないかと私は思う。それはローマ書8章の中にもその大事な要素が出ている。ですから、私たちがこのコリント前書13章から愛を、キリスト教の愛の本質をこの言葉そのものから学ぼうとして果たしてできるか、それはちよつと問題です。だいぶ問題かもしれませぬ。ずいぶん変わったことを言いますが、仕方がない。ヨハネ書簡に極めて大事な愛の本質が出ている。

にもかかわらず、パウロはもう一気呵成に、詩的なものすごい奔流をもって、これが迸つ



たのだろうと思う。だから一面まことに粗削りな文字でもある。けれども、文字づらではない。パウロという人は真に、愛の本質ではなくして、愛の本体につかまれている人です。

愛の本体につかまれているから、彼は何を言っても、そこに片鱗が出ようが、それが三日月であろうが、十日月であろうが、そこに表れたものは満月でなくたっていい。満月ではないです、この13章は。これはまあ半月くらいかもしれない。半月くらいでもいい。しかしながらちゃんと、パウロの描いた半月はその見えない別な方面に、隠された半月がほのかに見えている。そこが即ちパウロの霊筆である。パウロは満月を描くよりも、半月を描いた方が実はものすごい満月を描いたようなことになってしまふ。

それが私はコリント前書13章の姿ではないかと思う。まだこんなことを言った人はないかもしれないが、私はパウロにケチをつけながら、実はパウロを本当に評価しようと思う。即ち、彼は愛の本体につかまれているから、その描いたものはデッサン的な半月であった。けれども、その隠されたところの別な半月が見る目には見える。その隠された半月を見ながら、その露なる半月^{あらわ}を見ている人は、本当にコリント前書13章を読む人である。そういうわけで、私たちはむしろこの13章が完璧な文字でないのをよろこぶ。いったい、福音のすがたはそれでいい。しかしながら、その表れた半月がいかに素晴らしい弾力性をもったものであるか。日本画の素晴らしさはそういったところにあるでしょう。

パウロのコリント前書13章がいわゆる名答案でないので、うれしいですよ。私もヘタな答案をここにぶちまけますから、皆さんはその隠れた言外のところを読んでいただきたい、聞いていただきたいと思う。

「小池先生はまだこういうことを言い残こした」

なんて批判したのではダメですよ。「言わずに」言い残しておきますからね、たくさん(笑)。

●エロースとアガペー

「4愛は寛容にして慈悲あり」

と、まず肯定的なことを先に言いました。いったい、「愛」といったって、いろいろあります。「エロース」とか、「フィロース」とか。しかし、ギリシア語で「エロース」という言葉は、今いういわゆるエロチックとかいうエロースとは本当はちよつと違うんです。非常にこれは実は立派な内容をもったもので、ギリシアのエロースというものは、人間の魂が上に向かつてのひとつの傾向性である。これはギリシア哲学、プラトンをお読みになればすぐわかる。有限的な感覚的な我々人間が、超絶の世界――それをギリシアの文字を訳せば「^{けいそう}形相」という訳になりますが。愛は完全の形相というものの、見られたものの「イデア」です――その「イデア」の世界に向かつて、それを憧れて、それに向かつて努力精進し、それを追求し追慕する。慕い求めるといふ、その姿が「エロース」です。だから、いわゆる理想主義的、浪漫主義的な心の傾きがみなエロースです。私たちはみなこれをもっている。



それ自身は決してわるくない。この衝動がなかったら、人間の進歩展開、文化文明というものは展開しやしない、このエロースがなかったら。その意味において結構なんです。超感覚的なものに向かつての追求です。完成、完全の世界、あるいは円現、円成、円成と言ってもいい。円現円成の世界への追求なんですから。

そういったような求め。ただし、そこで大事なことは、人間がその場合にその追求する我というものが主体で、完成のイデアの世界というものは客体なんです。そういった角度であるわけです。それはアリストテレスの倫理学をみましても、神というものはそういった最後の追求の対象として考えられている。

ところが、ヘブライの世界はそれと正に反対なんです。ギリシア的な「形相」は、ヘブライにおいては霊的人格な活ける神です。単なる「イデア」とか「形相」とか「理念」とかいうものでない。これは活ける神であって、人間、我というものは実に客体であって、こつち(神)が主体なんです。天動説と地動説のちがいが。コペルニクスの転向というのがギリシアとヘブライの方向の差なんです。これ(ヘブライ)は逆に上からきている。上から下に向かつてきている。ギリシア的なのは我が中心で、それから向かつている。高いところに、四方八方に向かう。これが「エロース」の衝動で、こちら(神)のは即ちいわゆる「アガペー」なんです、上から来ているから。完全に向かつての追慕追求、素晴らしい価値あるものに向かつての求め、これはエロースの衝動です。

アガペーは相手の価値に関わりがない。キリスト教の愛は、神が主体であって、価値の実に小さなもの、ほとんど無価値のようなものに向かつて注いでくるところの事態がアガペーなんです。先ずそれだけのことは――まあほとんど御存知ではありますけれども――ちよつと申し上げておきましょう。

●愛はゆつたりとした気分

では、その具体的な文字の細かいところに少したちいます。

「愛は寛容にして慈悲あり。」

何かここでパウロは道徳的お説教をしているようで、あまりおもしろくない、これを外側から見ているとね。「寛容にして」という言葉は――よく寛容というように言う方がありますが、それはパウロの真似をしたのでしようけれども――この言葉からいいますと、「マクロテューメイ」という字で、これは「マクロス」という字と「テュモス」という字からきている。「マクロス」というのは「長い、大きい」というような字です。「テュモス」というのは「気分」、ドイツ語の「ムート」[Mut]、それが烈しい気分だと「怒り」というような意味です。気分が長い。ゆつくりしたゆつたりとした気分です。ドイツ語でいうと「ラングミューティヒ」(langmütig) なんていう訳にもなりますが。

「愛はゆつたりとした気分である」



という。おもしろいですね。

その次の「慈悲あり」という、この「慈悲」という字は非常に行為的です。人に行為的である。これは「クレーステューエタイ」という字で、積極的です。前の方がゆつくりと長い気分を受けとっているようでありますから、これは消極的です。消極的なことを先に言つて、それから積極的なことをあとから言っている。

「愛は寛容にして慈悲あり」

と。愛は、気がゆつくりしていて、行為的である。もうひとついうと、愛は受け身の態勢であると同時にまた、能動的な態勢である。心のね、いい意味においてですよ。日本語で「大度」とか「大量」とかいうような言葉があります。あれに当たるですよ、始めの方の字は。寛容というか、愛は大度にして、大きなはかり、あるいは大量にして、また慈悲ありと。「慈悲あり」は――あるいはこう言つたらいいかもしれません――

「善意的である」

と、善意をもっている。善き意志というよりかむしろ、この場合の「意」は「こころ」の意味で、「善きこころ」ですね。非常に温かい積極的な善いこころをもっている。親切味が非常につよい。

「愛は妬まず、愛は誇らず、驕らず」

今度は、否定の言葉で言つてきました。みんな「ウー」「否定詞」と書いてあります。「妬む」という字は英語の「ジェラシー」という字の元の字で「ゼーロイ」という字です。アガペーは妬まない。先ずそのところが少し詳しく言わなくてはならないかもしれません。

旧約聖書にはこの「妬み」という言葉が出てくる。しかも、エホバの神さまは「妬みの神」であるなんて書いてある。それで困るんです。申命記の4章24節に、

「4 汝の神エホバは焼^{やきつく}尽^{ねたむ}す火、嫉妬^{ねたむ}神なり」(申命記4・24)

それから5章の有名なモーセの十誡の中にも書いてある。5章8節に、

「8 汝^{おのれ}自己^{きご}のために何の偶像^{べうぞう}をも彫^{きざ}むべからず……9 之を拝^{つか}むべからず之に事

うべからず我エホバ汝の神は嫉^{ねた}む神なれば」(申命記5・8、9)

と。即ち、偶像を造つたらば、偶像を拝むだろう。偶像を拝むような在り方に対しては、こっちは妬みの神であるぞという。ヘブライ人というのは非常にしつこいですね。日本人はあつさりしています。食物や何かをみてもとかくあつさりしたものが多くですが、ヘブライ人はものすごくしつこい。だから、この「妬み」なんていういやらしい、私たちにはどうも感心しないような感情をもつて神さまのことを表現している。これは日本語の訳がわるいかもしれませんが、「妬み」なんていう訳が。「カンナー」という字で、

「妬みの神」

は「エール・カンナー」といいます。「神の妬み」「キヌアツ・ヤハウエー」という。「神の妬み」はむしろ、



「神の熱心、エホバの熱心」

ということ。イザヤ書63章の15節に、

「¹⁵ねがわくは天より俯観^{みそな}わしその栄光あるきよき居所^{すまい}より見たまえ、なんじの熱心となんじの大能あるみわざとは今いずこにありや」(イザヤ63・15)

この「なんじの熱心」という字がさつき言った「妬み」と同じ字です。だから訳は、私は、
「熱愛の神」

がよからうと思いますがね、「妬み」なんて言わなくて。神さまは「熱愛の神」。

太陽の光は、なかなか夏の光は暑いですが、しかし、神さまの白熱はもつとすごい。

「心頭を滅却すれば、火も尚涼し」〔快川和尚^{かいせん}の言〕

なんていうけれども、神さまの熱い愛の中に入れば、熱くなくなるといようなわけですが。滅却しなくともいいですから。そういう白熱の、エホバの神さまは熱愛あるいは白熱の愛の神である。むしろ、「カンナー」という字をそういうような言葉でとつてもいい。しかしながら、この字は実際、人間的な妬みというような場合にも使われてくるものだから、神の側にも「妬み」という訳でいいです。神の場合にとって「妬み」という言葉はあまり感心しないけれども、まあいいです。

とにかく、偶像、サタン、他のもろもろの霊、偽りの霊、そういったようなものに捕らわれることに対して、人間の魂を、一人びとりの魂を哀惜してやみませんから、そんなものに捕らわれていたり、眠っていたりしたらば、神さまは目をさませる。そして、それに白熱の愛をもつて臨んでくださるといのが、この「神の妬み」という。ところが、パウロここでは「妬まず」と書いてある。もちろん、パウロがここで「妬まず」と言ったのは、いわゆる人間の悪い感情としての妬みです。

「妬む」の反対の感情は何ですか。これは「誇り」になる。その次にすぐ出ている。「誇り」とか「驕り^{たかぶ}」とかいう。誇る人、おごる人は、その他人^{ひと}に向かっては逆に今度は妬みの感情となる。これは表裏一体しているところの感情ですよ、この「妬みと誇り」というのは。だから、パウロが

「妬まず、誇らず、驕らず」^{たかぶ}

と書いてありますが、結局これは同じことを別な角度から言っているだけのはなしです。

●神の如くされる

「愛は妬まず、誇らず、たかぶらず」

と。「妬み」という言葉は何でよく表れているかというと、創世記3章のあの蛇。あの蛇が妬みを起こした。アダムとイブの罪に陥るところの、そのきつかけをつくったサタンの使い蛇というやつは、これは妬みの権化^{ごんげ}です。邪性という。この邪性が即ちこの妬みのことで、これはあるドイツの註解書に



「妬みは悪の女王である」

と書いてある。妬みの感情というものが悪の女王である。これは叛逆の衝動をふくんでいる。平和を攪乱^{かくらん}し、そして叛逆の衝動をかこつ。そのことはミルトンの『パラダイス・ロスト』〔樂園喪失〕をお読みになると、なかなかよく描いてある。

それでは、サタンが蛇をつかわして、妬んだその言葉はいつたどこにあるかというところ、第3章の5節に、

「⁵神汝等が之を食^{くら}う日には汝等の目開け汝等神の如くなりて善悪を知るに至るを知りたもうなりと」(創世記3・5)

神さまは素晴らしいものですから、サタンは自分が神の如くなりたい。神さまを妬んだ。このサタンというのは神を妬んだ。自分もひとつ神の如くなって大いに権勢をふるわしてやろうというのが、このサタンの妬みの感情。それは即ち叛逆です。そいつを逆用して、そいつを利用して、アダム・イブに向かつて、

「お前たちもあの神の如くなるよ、これを食べたなら」

といって誘ったわけですよ。それは

「神の如くなるよう」

という、そういう衝動はギリシア的な衝動からいくとこのエロスなんだ。即ち、完全なる形相、完全なるものに成ろうとする。

私たちは、完全なるものに成ろうとするのは悪いですか。悪くない。ではどうしたらいいか。修養というものは人格が完成することである、完全になることです。

「汝ら、父の全き^{まこと}ごとく全かれ」

という、キリストが山上の垂訓でいわれた一番素晴らしい言葉です。一番素晴らしい言葉が、キリストが片一方で言うし、片一方はその衝動をもつて誘って来ると、こういうわけです。さあ、困った。

神の如くなるうとするときに、

「神を無視して、自分が神の如くなるよう」

という、これが即ち間違った動き方なんです。我が神の如くなる。

「神によつて神の如くされよう」

という意味において、神の如くなるうというならば、それはいいんです、その願いは。けれども、自分がひとつ神の如くなるうというのは、紙一重だけれども天地霄壤^{しやうじやう}の差になる。これが非常に間違いやすいところで、こここのところを本当にしっかり魂の奥底からつかまえるか、つかめるか。

あたまでは分かりますよ。けれども、これがもし私たち生まれつきの人間が本当にその角度から出来るならば、キリストの十字架はいらなかった。ところが、私たちはそれが出来ない。私たちは本来、妬みの魂である。サタンにすぐ捕らわれるところの魂である。す



ぐ誇るところのものであり、人間は生まれながらにして自己弁護者であり、そして、すぐふくれあがつて驕^{たかぶ}るところのものである。

パウロはここでもつて、

「愛は妬^{たかぶ}まず、誇らず、驕らず」

と否定的な三つの言葉でいつていることは、

「寛容にして慈悲あり」

という言葉よりももうひとつ奥の、実は大事な事態なんです、このあとの「愛は妬まず、誇らず、驕らず」が。一切の人間の人と人との関係、社会、国家関係、世界の一切の人間の間の関係が、「妬まず、誇らず、驕らず」ということが本当に実践されていけば、世界は本当に平和であります。ところが、すべてこれを解剖して煮詰めてみると、妬み、誇り、驕りというようなものがその陰に潜んでいる。これがみんな、サタンが植え付けたところの毒の種であります。

そんな愛がいつたいあるかというわけで、

「愛は妬まず、誇らず、驕らず」

というパウロがいうところのこの愛は、一応、人間は生まれつき多少、「妬まず、誇らず、驕らず」ということはわかるし、相対的にはそれもあるところまではできます。けれども、それが結局もうひとつ奥の暗黒の勢力でもつていつも引っくり返されてしまう。ここに世界の悲劇がある。人生の悲劇がある。社会の悲劇がある。

そこで、このサタンの邪性というようなこの妬みというものの、この関係を愛はいつたいどうするだろうか。「妬まず、誇らず、驕らず」という、私たちの生まれつき有っているところのいろんな感情や能力や知性や知情意のはたらきというものは、

「これは罪だから、そいつはみんな切つてしまえ」

といって、もしそういった衝動を抑えて、いわゆるもう一切にか無念無相でどうにも「無くしてしまう」というような角度の、ある意味においては仏教的な角度になって、解脱するという方法もあるでしょう。百八の煩惱を消していこうという。

でも、聖書の世界は、そういった「消していこう」というのではなくして、そういった人間がサタンに毒せられているものをもうひとつ別な作用でもつて、毒性を逆に毒でない要素に変換させるんです。変換させる力、変質変貌させるものがこの愛なんです。「愛は妬まず、誇らず、驕らず」というものを逆に、

「愛がくるといって、妬みは変貌させられる、誇りも変貌させられる、驕りも変貌させられる」

ということなんです。これは最も大乗的な福音である世界です。だから、

「^{おそ}恐るるなかれ」

という。あなた方は修養によつて行くのではない。何か新しいものを受けとることによつて、



私たちはこの妬みとか誇りとか驕りとかいうのを引っくり返してしまう。引っくり返して逆用するんです。これはだいたい私は危険思想みたいなことを言っているようですが、決して危険ではない。愛の実体からしている愛でなければダメなんです。

●死生の転換

そこで、コリント前書12章からずっと読んでくると、御霊の賜物のことを言っていて、そうして、

「更に善き道を示さん」

とパウロが言って、この愛が聖霊から来しているものであるということは、何も言わない。何も言わないけれども、

「この愛が御霊の賜物として最大なものである」

ということとは、これは隠されたるパウロの答案なんです。

私たちが愛というものをただ観念してみたってダメですよ。愛は実際、具体的に愛の実体から来ている。これ「観念」は形相なんだ、こっちは。ところが、

「神は愛なり」

とヨハネがはつきり言っているとおり、愛の神というものから来しているところの愛、これが即ちさつきから言っているアガペーなんです。この神の愛がくれば、私たちのいろいろな感情というものを、心の動きというものを、みんなそれを変質させてしまう。

エホバの神さまは

「妬みの神」

といった。しかしながら、その妬みという神は――妬みという言葉は妬みであつても――聖き熱き愛であります。神さまの愛は聖き熱き愛であつて、私たちの魂を救い上げるところの愛です。それを「妬みの神」なんてことをいつている。だから、そこに逆説的なそんな言葉をつかっているところに、むしろ聖書のおもしろみが――おもしろみと言ったらおかしいけれども――私たちの妬みというならば、本当に神に対するところの愛は、神が「妬むほどに」というような言い方で私たちを愛するその愛に応えるように、私たちの妬みというものは引っくり返ってしまう。そのときに、

「愛は妬まず」

ということが本当の意味においてつかまえてくるわけです。

だから、悪を転じて善となす。邪を転じて正となす――何といったつていい――転邪転正といつてもいい、転悪転善といつてもいい。悪を転じて善となす。

放蕩息子は、享楽やいろいろなこの世の財や幸福やそういったものに囚われて、そいつを愛しました。ところが、父はこの放蕩息子の魂を妬むほどに愛している。

「ああ可哀相だ、あんなことになっている」



と。放蕩息子はどうとうすつからかんになって、どうにもならなくなって、そうして彼は戻って行った。戻って来た時に父は、

「お前は、ああいう感情は悪いじゃないか」

とは責めなかった。即ち、彼の他の物を愛していたところの愛が父への愛に変わった。だから、父のところに戻って来た。即ち、愛は方向転換をし、そして愛の質がすっかり変わっている。我々人間の感情にはそういった愛という感情があるんだからね。その感情を分析して、

「その悪い方の感情はすてて、善いものだけを残しましょう」

なんていったって、それはダメですよ。我々は実にまるで風のように――脳波のようにも感情を記録したらいろいろに動くでしょう――どんなに波打っているかわからない。そのように捕捉しがたい我々の感情は、妬みというような感情で動いているやつが、魂の方向が本当に神の方に向かっていくと、これはこの感情がずーっと別なカーブをなして動いていくから、これは同じものが動いていく。

同じものが方向転換、変質してしまっている。これがどこかで切れてしまつて、別な感情がまた新しく入ってくるなんて、そんなのではない。そういう意味において、我々の心の動きというものはすっかり変えられる。

それは説明としてはまた別に、

「そんなものはみんな棄ててしまえ。それにみんな死ぬ。そうすれば、新しく生きる。

そういうった生まれつきの感情にすべて死ぬ。そうすれば生きる」

という。その転換というものはもちろん、死生の転換ということをもつて表現されている。また、ある意味において、そういう表現をもつべきなんです。私たちのすべての有つものは十字架につけられるという。つけられるけれども、私たちはいつペン死ぬけれども、死んだといつても、何か私たちの生まれつきのものが全然無くなつてしまつて、全然新しいものが物理的にそこに生ずるのではない。相変わらずの私たちです。けれども、私たちは死ぬということは、完全にそこで変質してしまうことです。変質、変貌してしまふ。

●変質変貌

「愛は妬まず、誇らず、驕らず」

という。ところが、パウロが一生懸命で

「我は誇る」

と言っているじゃないですか。「私は誇る」と。何を誇るか。それは、

「イエス・キリストを誇る」

という。同じパウロの中に誇るといふ感情が二つはたらいっている。パウロは、

「自分は、これは愚かなる人のごとくにものを言うけれども」



なんて括弧して、そして、

「我にも誇るべきところあり」

なんていって、地的な自分の消息、自分の知識、生まれ、自分の地位はローマ市民である、誇るならいろんな誇ることがあるということを、括弧して言っている。パウロが地的な意味において誇るということを、

「これは愚かなる人のごとく言うけれども」

なんてパウロは言った。けれども、

「私はそんなものはみんなもうすっかりどうでもいい。私はキリストを誇るんだ」

と。やっぱり、「誇る」という言葉がある。誇るという感情はパウロの人間の中にある。「誇る」と言っている。その誇りは今度は完全にキリストを誇っている。誇るという感情はまるで違ったものになっている。だから、変質変貌と申し上げる。

そのように、私たちの生まれつきのいろいろな、知識の勝っているひとは、

「もうそんな知識はよしなさい」

といって、知的なはたらきをやめたら、しょうがないですよ。感情の勝っている人は、

「そんな感情は危ないからよしなさい」

といって感情を抑制してしまつたら、その人はフラフラになつてしまいますよ。意志的なひとは、

「あれは我が強いから、そんな私の強いやつは、その我を抑制して、どこかへ閉じこもつてじつとしていろ」

なんて言われたら、その人はどうにもならない。その私の強さ、またその感情の豊かさ、またその知性のはたらき、そういつたものがみんな変質変貌されて、神のものとなつてはたらく。そのところに本当に今度はその人が神の器としてもものすごく使われるゆえんがある。パウロという人は生まれつきなかなか我が強い。だから、彼はキリストを迫害して、クリスチャンを縛つて牢屋につれていくような、最も首魁しゅかいであつたじゃないですか。ところが、そのキリストの味方を迫害しているパウロが、今度はすっかりキリストにぶつ倒されて、いったん死生の転換をしたらば、今度は同じようなその力が全く聖化され祝福されて、驚くべき、人を救いあげていくところの力となり、意志となつて、

「イスパニアの果てまでも伝道していくよ」

というような、今度はキリストの力が彼に於てそれを逆用し始めた。

だから、皆さん、生まれつきもっているところの長所は、それ自体としては短所であります。それ自体としては、すぐ驕おごつたり、高ぶつたりするところの短所である。けれども、その長所が一方、棄てられるときに、即ち変質変貌しまして、死生の転換をおこなつて、即ち転悪転善となる。そして、神のものとして使われていく。だから、みんな一人びとり掛け



替えないものをもっている。

けれども、長所を直ちに肯定してはいけません。私たちはその自分の特色、長所というものは、

「ああこれはいい」

といって直ちにそれを肯定したいが、それはすっかり変わっていないなくては、必ずそいつは驕り高ぶり誇りますから。驕り高ぶり誇る。

ところが、この神の愛がやっていると、そいつがすっかりぶつつぶれて、新しく使われる。ここに私は、「愛は妬まず、誇らず、高ぶらず」という大事な意味をその角度からつかまえないと思う。

道德の世界では、これが勿論できない。

「愛は妬まず、愛は誇らず、驕らず、非礼を行わず、寛容にして慈悲あり」

と、一生懸命でそれを守ろうとしたってダメなんだ。ところが、この

「愛は……」

というときに、パウロはいわゆる徳目を言っているのではない。徳目ではなくて、「キリストの愛」は、いや実にキリストにおいて、キリストという愛にすっかりつかまれると、それは本当にゆつたりとした心であり、善意となり、下らない妬みなんかみんなすっかりなくなる。実に逆に「妬まず」の反対の、愛は本当に人を愛惜してやまざるところの魂となつていく。また、人に長所があれば、本当にそれを祝福してやっていくことになる。

「誇り」の反対は何ですか。謙りである。愛は謙るものである。「驕り」の反対は何ですか。もうひとつ言いますと、「砕け」です。へりくだって本当にくだける。ですから、愛は、妬みとかそねみというようなものはすつかりとかれて、人を愛惜してやまないところの、深く人を愛惜するところのものになる。「妬み」の反対は、本当に人を「愛惜」するものになる。どんな人をも愛惜することになる。愛し惜しむ。また、善きものを本当によろこぶ。「誇り」の反対は「謙り」。「驕り」の反対は「砕け」となる。

感情からいいますと、この妬みというものは非常に邪性でずるがしこくて陰性であります。けれども、今度はその妬みの感情が引っくり返ると、本当に人を深く、床しき隠れたるうちに――いわゆる陰性ではなくて――隠れたるうちに自分の愛すらも人に示さないような意味の、深い愛になっていくわけです。誇りの方は、これはどちらかというときと陽性であります。それが今度は、深く謙りまた砕けとなる。愛は愛惜し、そして謙りまた砕ける。

●長幼序あり

「⁵非礼を行わず、己の利を求めず、^い憤らず、^い人の悪を^い念わず」

みんなこれは二つずつ対になっている。「非礼を行わず」は、「よろしきになわなない」ことをなす



というように訳してもいいわけです。礼、秩序を乱すようなことをしないということ。コリント前書14章40節に、「**宣しきに適いて**」と書いてありますが、あれがこの字と同じ字なんです。

「**40 凡ての事、宣しきに適い、かつ秩序を守りて行え**」(コリント前14・40)

と書いてあるでしょ。すべては宣しきになつてゐる。日本語でいうと礼儀作法――まあ礼儀作法というところと言葉が少し限定されたような気持ですが――よろしきになつて、かつ秩序を守りて行えと。

私たちも今度の集会は、「宣しきに適つて秩序を守つて行い」つつあるようで、誠に結構であります。それが即ち、秩序を重んずることです。神さまの天国というのは神の支配という意味です。神の支配しているところのこの全宇宙、この歴史というものは驚くべき秩序をもっている。これは霊界の黙示を受けた人はよく語っている。スエーデンボルグや何かを読みますと、実に天界が素晴らしい秩序においてあるということが書いてある。段階がある。ダンテが『神曲』でもって天国篇を描いていますが、非常にダンテは地獄から天国界に至る秩序を重んじてゐる。ダンテという人は驚くべき、こうまで数学また建築学的に非常に秩序立って描いています。

今は、「自由、自由」といつて何か非常に秩序が、ヘタすると非常に乱れる。

「**長幼序あり**」
ちようようじよ

なんて、私たちは論語で教つた。けれども、この頃は「長幼序あり」なんてことは、だいいち今の若い人は聞かないかもしれない。私たちは教場「教室」に入りましても、私がちよつと会釈しても、さあ何人の生徒がそれに挨拶するでしょうか。いったい、先生の方からお辞儀するなんておかしなはなしですよ。ところが、それに挨拶しない。これはもう既に長幼序がない。私たちは何も威張るわけでも何でもない。授業を始める時には挨拶をするのが、これが宜しきに適つた礼儀作法というものです。決して虚礼でも何でもない。お互いに気持よくそこで始まるわけです。それが何か頭をさげると人格でもさがるようにおもう。頭をさげると人格はさがらない。ところが、会社に入ると、一生懸命で頭をさげますね。実にそれはおかしなものです。

これは何も若い人がわるいのではない。教育の掌に当たつてゐる私たちがわるい。私たちが、小学校から大学に至るまでの先生方がもつと自覚しなければいけない。そして、そこに本来あるべき秩序というものが立たなくては、法則の世界が本当に気持よくいくところには。法則は拘束でないですから。拘束は人をしぼる。けれども、こつちは法則ですから。法則をすぐ拘束と考えるですね、今の若い方は。法則は拘束ではない。

法則のあるところにこそ本当の自由がある。カントが義務と自由の概念を、裏表にして道徳哲学を展開している。その通りです。自由のあるところには義務、責任がある。

「集会は聴講自由」



と書きました。しかしながら、自由は勝手ではない。自由に聴講するとは、そこに責任をもつて臨んでいるということです。また、人間の営みには秩序がある。神さまの世界は驚くべき秩序の世界である。

それを今度は人間的な法則〔規則〕をあまり立てて、そしていわゆるカトリックみたいに、もう動きのとれないような、ああいうような秩序が本当の秩序であるとは、ちょっと私は困るですね、この宗教の世界で。そうじゃないけれども、神の活ける法則という、神の世界は、活ける聖意がはたっているところの法則は、天則というものは、何ともいえないところの自由さというものをそこに有っている。しかもそれは決して逸脱をしない。神の聖意になっっているところの在り方というものは、本当に逸脱がない。逸脱をしているならば、それは何か今度は神の法則を、「神の法則」と言っているうちに自分がそいつを利用し始める。そうしたら、それはさっきと同じこと、霊の事態をみんな私することになります。それに従いながら、それを満たし溢れていくというのが本当に秩序に従って、そして秩序を満たしていくもの。キリストはそうにしてモーセの十誡というものを本当に満たし溢れていたひとです。

●キリストの憤り

だから、この

「^{よろ}宜しきに^{かな}適わずというようなことがない」

という。また、「己の利を求めず」というのは、本当の意味は、

「自分自身の事柄を求めない」

ということ。「タ・ヘアウテース」「自分の事柄」を求めない、自己追求、自己中心でない。その次は、「^{いぎどお}憤らず」。この「憤り」という字には、公憤、義憤、私憤とがあります。勿論これは私の意味の憤りです。そういった憤りをしない。ダンテは地獄の所でそういった憤りの人間たちがどのようなになっているかなかなか巧妙に描いています。

キリストは、しかしながら、憤りましたよ。福音書をご覧になると、

「偽善なる学者、パリサイ人よ」

といって、もの凄く憤られた。もの凄くこれを攻撃された。これは神に於けるところの彼の憤り、^{こいつ}羔の怒りです。「神の怒り」という言葉もパウロが言っている。

「神の怒りそれに現れる」

というようにことを言っている。神の怒り、憤りというものがある。それはどこから来るかという、義から来る。神の義という方面から。即ち、義は関係がしっかり立つ。さつきから言っているその秩序が本当に立っている。神さまと私たちとの関係がはっきり立っている。「長幼序あり」ではない。

「神人序あり」



なんだ。神と人との関係がはつきり立って、神を神とし、己を神の聖意に沿わしめるという角度において、神の下に立っているのが、これが義である。これが、言い換えるとまた、秩序であるわけです。即ちキリストは秩序を、神の義を乱す者に対しては憤られる。学者・パリサイ人に対して、即ち己を義として^よいる、神を義としていなくて己を義としているところの、その角度に対しては、キリストは憤られる。けれども、キリストの憤りというもののは勿論、憤りのための憤りではない。これは本当にそこにおいて驕りからその人の魂を解放させんために、ある時にやむをえずして爆発するところの事態なんです。パウロは別なところで、

「怒りを、憤りを夕方まで遷延^{せんえん}するな」

という。人間は怒ることがあるけれども、怒っても、夕方まで怒りをのばすことはいかん。怒っても――いい意味において憤っても、その憤りのあとは相手が本当に善きにかえることを愛してこそその憤りですから――間違っていることについてははつきり、間違えていると言って、相手をやつつけても、それは本当に相手を正しい世界に入れようというひとつの愛の表れであります。その憤りという感情は、外からみると決しているものではないです。義憤であつたつて、あまりいいものではない。けれども、そこに本当に愛がこもっているから、その憤りはちょうど雷が鳴るように、あとはさすがしくなるわけです。即ち、それは私の憤りではないのですから、サッパリしている。相手をちつとも憎んではない。相手を憎んでいませんから、雷のようにあとはさすがしくなる。けれども、パウロがここで言っている憤りはそういう憤りではない。

その次は、

「人の悪を念^{おも}わず」

「おもわず」という言葉はちよつと弱い。むしろ、悪をあげつらわず。「ウー・ロギゼタイ・ト・カコン」ですから、

「悪しきことをことあげしない」

という。ことあげする前には、それを「思う」のだから、「おもわず」と訳したつていいけれども、言葉としては「悪しきことをことあげせず」ということ。

最初の「愛は非礼を行わず」は少し常識的な言葉でいうならば――私たちはこの社会を構成しています――そこで社会性を失わない。ひとに迷惑になるようなことはしない。

「クリスチャンではあるが、あれでクリスチャンか」

なんて言われるような、勝手気儘では困る。我々は実存面でそういうような、

「汝らの義、学者・パリサイ人にまさらずば」

と言われたように、キリストの山上の垂訓にたくさんあるように、実存面で指さされるようなことがあつてはならないわけです。

けれども、パウロはいろいろな人間の、その実存のいろいろな面を、あるひとつの焦点



をもって今ものを言っているということに、よく気をつけてください。

「こういうことをしてはいけません、いけません」

なんて、ただ説明してお説教をパウロはしているのではない。

「愛はそういうものではない」

と言って、「愛は、愛は」と言っている。

それから、いわゆる自分のことを思わない。

「己の利を求めず」

ですから、利己的でない。「憤り」は、いちばん先に「愛は寛容にして」とあつたでしょ、大度である。即ち、本当に大度であるならば「憤らず」です。だから、あの「寛容にして」は逆の言葉でいうと、「憤らず」ということにもなりますよ。それと相応えるような言葉です。それからその次は、「愛は慈悲あり」「礼儀がある」ときき言いましたね。それに対して今度は、「人の悪を念わず」ですから、そこところは、「憤らず、悪をおもわず」はちつうど一番先の「寛容にして慈悲あり」と相照応するような言葉です。それを別な言葉でいったようなもの。「人の悪をあげつらわず」ですから、礼をもって人を思つて、人の善きことをむしろあげつらつて、悪しきことをあげつらわない。善きことをあげつらうことは、「慈悲あり」という善意の方です。それから、

「⁶不義を喜ばずして、真理の喜ぶところを喜び」

と。さつきから申し上げているところの義です。義の反対が不義です。「アディキア」という。不義・不正というものを喜ばず、そして「真理の喜ぶところを喜ぶ」というのは

「真理を一緒に喜ぶ、真理を共に喜ぶ」

という字です。直訳すれば、「真理を共に喜ぶ、一緒に喜ぶ」。

「不義を喜ばず」という。けれども、人間にはデーモンニッシュな感情がありまして、まあ今、一生懸命ではやっている映画なんていうものを見てごらん下さい。映画だとか小説だとか、たくさん不義の世界が展開してある。ところが、そいつがおもしろい。不義を喜んでいる。何かギャングだとか何とか、またあるいは不義のいろんな事態、いわゆる不義の事態、それらが描写されているのを見て喜んでいる。

「そうでなければ面白くない」

なんて。そういったような小説が、発禁になるような小説がものすごく喜ばれて、飛ぶようにベストセラーなんてなわけです。これは人間がこの不義を喜ぶ。低劣な感情が、デーモンニッシュなそういったようなものが動いているわけです。

ところが、その反対は「義を喜ぶ」。モーセの十誡において表れているところの神の義を喜ぶことが私たちはできない。だから、「不義を喜ばず」を反対に言えば、「義を喜ぶ」です。義を喜んで本当に

「自分はエホバの法を楽しむ」



と詩篇の40篇にあった。あれはエホバの法を楽しむという、この義を喜ぶ方は福音の世界です。

義は喜べない。パウロがローマ書7章でいつている通りに、義が喜べない。ところが、

この義を喜ぶことを本当に喜んでいたのである。愛は義を喜ぶ。反対にいえば、

「愛は不義を喜ばず」

ですが、愛は義を喜ぶ。

●キリストの前にぶっ倒れる

それから、

「真理を共に喜ぶ」

「共に喜ぶ」は「シユンカイロー」という「共に喜ぶ」という言葉で、いちばん端的にい例はルカ伝15章です。その6節、9節を見てもらなさい。キリストの譬話たとえですね。

「⁶家に帰りて其の友と隣人と呼び集めて言わん「我とともに喜べ、失せたる我が羊を見出せり」……⁹遂に見出さば、其の友と隣人と呼び集めて言わん、「我とともに喜べ、わが失いたる銀貨を見出せり。……³²されど此の汝の兄弟は死にて復生き、失せて復得られたれば、我らの楽しみ喜ぶは当然なり」

「我とともに喜べ」とある。また、「我らの楽しみ喜ぶは当然なり」と。「お前も一緒に喜ばないか」という気持なんです。父が、放蕩息子が帰つて来た時に、

「お前もなぜ一緒に喜ばないのか」

という言葉が言外にあるわけです。一緒に喜ぶということ、コリント前書12章26節にもあります。

同歎共苦と言いますね、ともに歎び共に苦しむという。その「共に苦しむ」方は非常に「思いやる」という言葉です。これもやはり「シユン」という字がついている字で、これはヘブル書4章15節と5章2節に出ている。

「¹⁵我らの大祭司は我らの弱よわきを思い遣ること能わぬ者にあらず、罪ほかを外にして

凡ての事、われらと等しく試みられ給えり。」(ヘブル4・15)

「²彼は自らも弱よわきに纏まとわるるが故に、無知なるもの、迷える者を思い遣ることを得るなり。」(ヘブル5・2)

「キリストは弱き者を思い遣ること能わざる者にあらず」と。「弱き者を思い遣る」という言葉で言っておりあります。それが「シユンパテオー」、英語の「シンパシー」という字です。パトスを共にするという、苦しみを共にする、思いやる。歎びを共にし思いやる。

この二つのことが出ている。神さまは、キリストは私たちと歎びを共にし苦しみを共にしてください。本当に共にしてくださる人は、私たちの中に御霊をもつて入ってください。このことができる人だけが、本当に共に一緒になつて苦しみ、一緒になつて喜ぶ。私たちが同



情するというただ人間的な同情という言葉ではまだ表面的であります。本当にその人の中に入つてというときには、私たちは祈らなければその中に、とにかく「入る」というような角度にはならない。本当にその人のために祈るといふときに、そのときに喜びが共にあり、また苦しみを共に荷^{にな}う。そして実際、存在的にそいつをこちらが背負うくらいなところまでいくわけです。キリストは共に苦しんで、いや実に私たちをどん底から担つてくださる。

イザヤ書63章のところにしているのが有名なその言葉です。63章9節に、

「^{なやみ}かれらの艱難のときはエホバもなやみ給いてその^{みまえ}面前の使をもて彼等をすく^{あわれみ}い、その愛とその憐憫とによりて彼等をあがない彼等をもたげ^{いにしえ}昔時の日つねに彼等をいだきたまへり」(イザヤ63・9)

というのが、まさに「共に」の非常に深い角度であります。

ここでは、

「真理を共に喜ぶ」

という。聖書はこの「真理」「アレータイア」というときに、勿論いろいろな意味あいがあります。けれども、この真理という言葉においては、いわゆる私たちの考える真理、観念的、真理と、それからこちらの情意的、真実、というものと、もうひとつ奥にもっと具体的、な真理と、この三つの気持が含まれてその使い方があるわけです。即ち、

「我は道なり、真理なり、生命なり」

と。キリストは、彼は真理です。キリストから発しているところのこの真理というものと。キリスト自体が真理である。真理は説明できない。真理とは何ぞや。福音書に來なさい。福音書のキリストを^ご覧なさい。私たちは

「真理とは何ぞや?」

ときかれたらば、

「福音書のキリストを見よ」

と言うよりか仕方がない。その他に説明のしようがない。福音書のキリストをみて、そしてキリストの説明することのできない多角的な、自由な、無限の表現体であるところの、神さまの真理そのものの受肉したところのもの。

「言が受肉した」

というけれども、言は即ち真理です。

「はじめに真理あり」

と言つたつていい。その真理が本当に受肉した。この真理が世にやつて來たが、この真理をわきまえない。

けれども、真理はわきまえる世界ではない。わきまえる世界ならば、研究・観察・思索でもつて分かりますよ、人間の真理といふのは。それはどんなものでも、研究・観察・思索でもつ



て分かるけれども、キリストが開示したところの真理は――研究・観察・思索も結構です、それもわるいとはいいません――けれども、それよりももうひとつ奥に、その真理の中に自身を投じなければ、真理にぶつかってみなければ、そして真理の前に本当に一回降参しなければつかめないとこの真理なんです。真理は、このキリストという真理は、その前に降参しなければダメです。

「私はキリストが分かりました」

なんて絶対に言えない。キリストの前に降参するまでは、このキリストの真理は入っていない。

「投身する」

といいます。「投身する」というけれども、そいつは自分が生まで生きていて投身なんかしたってダメです。即ち、キリストの中に投ずるということは、別な角度からいえば、キリストの前にぶつ倒れることです。キリストの前にぶつ倒れたら本当に投身できる。即ち、キリストに降参しなければこの真理はつかめない。

しかも、キリストという驚くべき真理、これはいったいどの角度から私たちがその真理の中心をつかむか。あるいは、真理の中心につかまれるか。キリストというものは自由自在にいろんなことが現象されているが、それは結局、キリストは愛のかたまりである。だから、

「愛は真理の喜ぶところを喜ぶ」

というのは、キリストから来ているところの愛ならば、本当にキリストとその真理を共に喜ぶ。

●愛はすべてを包む

「愛は、⁷凡そ事忍び、おおよそ事信じ、おおよそ事望み、おおよそ事耐うるなり」

「凡そ事忍び」とありますが、「忍ぶ」と訳したってまちがいではないけれども、この言葉は「包む」という意味にもとれる。むしろ、そうとった方がこの場合は適切でしょう。「パンタ・ステゲイ」「凡てを包んで」しまう。

「愛は一切を包む」

という――ここは「愛は」とは書いてない――「それは一切を包む」という。「パンタ・ピステイネイ」「一切を信じ」、また「パンタ・エルピゼイ」「凡てを望み」、そして「パンタ・フボメネイ」「凡てを耐える」。この7節はなんと強い言葉です。

「愛はすべてを包み、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」

「包む」はあるいは「被^{おお}う」とも訳せる。ドイツ語の字引をみると、「ミット・シュバイゲン・ビデッケン」(mit Schweigen bedecken)と書いてありまして、「黙ってそれを被^{おお}ってしまう」



という。愛はそいつを被つてしまう。包み被つてしまう。「デアアルウムファッサー」(Der Allumfasser)という言葉がある。これはゲーテが書いている『ファウスト』の中の³⁴³⁸行のところにある。

「一切を包摂（包括）するもの」

という。これは神のことです。ヤスパースが

「信仰はウムグライフェン〔umgreifen〕すること、信仰はグッとそれをつかんでしまうことだ」

と言う。愛は一切を包括してしまう。愛はすべてを包み、またすべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。人の悪は包んでしまつて、自分の中にすつかり包んでしまう。また、自分の善はこれも包んでしまつて言わない。ただし、人の善はおおいに言っている。

「なんじ右の手のなすことを左の手に知らすなかれ」

というような、愛というものは大いに隠し包むという——いい意味においてですよ——それが一切を包んでしまう。

「みんな心得たり。ああよろしい。何とでもいい。誤解しようが迫害しようが、私たちのこの悲願霊願がわからなかりうが、結構でございます」

と。私はさっき言った憤りもありますよ。私は福音をつかんではいませんよ。私は福音につかまれています、つかまれつつあります。私は福音につかまれつつあることを、つかまれることを、これを念願としている。愛につかまれることを念願としている。愛につかまれることを、福音という驚くべき愛に。そして、

「自分の主義主張を言っているのではない」

ということをつてくれないということに対しては一面、私はその真理のために、この愛と福音の原始福音の真理のために——これはキリストが

「学者・パリサイ人よ」
びと

と言つて憤られたように——私たちも私たちなりの憤りはもつ。けれども、それは決してそれでお終いのものではない。私たちは、

「ああ結構です、いくら分からなくてもいいです。もうひとつ私たちはその奥の深い、『愛は一切を包む』というものをもっているから、決して行き詰まらない。」

と。もしこれをもつてないで、ただ憤つてもダメですよ。むしろ、そんな憤りはなるたけしない方がいい。なるたけしない方がいいけれども、時には爆発しますよ。それは止むに止まれない意味において爆発することもあります。

けれども、「愛はかくかくである」ということを言っているところのパウロのすがたのよ
うに、私たちが本当にある全きものに包まれて、それに貫かれあるような存在となるならば、
その現象において決してその現象だけにこだわることなくして、いつもそれが自由に展開
していつて、本当に人を祝福していくように進むことができる。だから、愛は一切を包む。「パ

ンタ・ステゲイ」、それは一切を包んでしまう。

「ああ、よしよし」

と、すべてを包括してしまう。

●神の愛の靈氣

この言葉はキリストの山上の垂訓の中の、

「天の父は凡てのものに雨を降らせ、凡てのものに光を与える」

というあの意味です。この空氣は地上のもの一切を包んでいます。

「お前は出っ張っているなあ」

なんて言わない。この出っ張っている机もちゃんと包んでいる。どんなものがありましても、空氣は包んでいる。なんと素晴らしいかな、この空氣のさまを見ていると。

この空氣は包むばかりでなく、私たちの中に入ってくる。入ってくると、私たちの血をきれいにしてくれる、浄化作用を起こす。まあこの空氣を冥想するくらい楽しいことはない。そして私たちの生命を本当に大きく素晴らしいものにしてくれるものは、この空氣です。今、私たちがこの現象界で一番大事なものは何か。生命にとって一番大事なものは何か。瞬時といえどもなくてならぬものは何か。それは空氣ですよ。空なるもの。空なる氣なんだ。それ自体は見えない。それ自体は見えないけれども、これは氣なんです。

この空氣が素晴らしい。私たちの肉体的存在に一番大事なものは空氣じゃないですか。私たちの魂の存在にとって一番大事なものは同じく氣なんです。靈氣というもの。靈氣。魂がなぜ窒息せずにいるか。これは靈氣という神さまの靈氣が私たちを包み、私たちの中に浸透している。どんなに無神論者でも神さまの靈氣の恩寵の中にある。

「ああ、あんな駄々をこねているなあ」

くらいに神さまの方では思っていますよ。無神論だつて、多神論だつて、何でもいいですよ。何とでも言わしておけばいい。神さまの恩寵は来ています。そして、駄々をこねている人のために祈れる。

「愛は一切を包む」

この神の靈氣に私たちが、神の愛の靈氣に包まれて、神の愛の靈氣を呼吸したならば、これは一切を包むではないですか。「愛は一切を包む」とは、この神の靈氣によって私たちは、本当に空氣が一切を包むように包むことができます。

皆さん、これは大事な真理です。この空氣が一切を包み、一切の中に浸透し、私たちは瞬時たりともこの空氣がなくては生きられない。私たちを包摂ほうせつしてくれるところのこの空氣。いわんや神の愛の靈氣は私たちを包み、無神論者であろうと何であろうと、一切を包んで、そしてこれを実は生かしている。魂はそのことに氣がつかない。

「本当にあなたの中に死んでも死なないような生命があるか。どんなものとも替え



ることのできないような歓びがあるかね」

と聞いたら、答えられないでしょ。なぜ答えられないか。この神の靈氣に触れていないから。この神の靈氣に触れたら、

「はい、私にはあります」

と答えられる。あなた方一人ひとり「あります」と答えられる。これが原始福音のクリスチャンなんです。この神の靈氣を本当に呼吸している人は、これは神の靈氣はキリストから来ている。イエス・キリストから来ているところのこの神の靈氣を呼吸している人は一切を包むことができる。

「神は正邪一切のものに向かって陽を照らし、雨を降らせている」

また、一切のものを空氣をもつてこれを包み、またこれを生かす。草木といえども、動物といえども、人間といえども、一切を生かしているところのこの光、この空氣、この水というもの。そのような恵みをもつて来ているように、私たちが神・キリストから来ているところのこの靈氣を吸いましたならば、この靈氣が浸透してきたら、一切のものが私たちはこの靈氣のおおらかな大きな靈氣によっている。

病氣とは何ですか。氣が病んでいる。肉体が病んでいるのではない。病氣は氣が病んでいる。この靈氣が本当でないから病氣という。病は氣からという。魂の世界は、

「一切の不義は赦され、一切の病は癒されてある」

と詩篇103篇の3節に書いてある。

「一切の不義は赦され、一切の病は癒されてあるぞ。キリストの十字架で癒されてあるぞ、救われてあるぞ」

と。なぜ相対的な現実には私たちは目がくらんでいるか。本当の現実、奥にあつて神さまの業は既に完了して、また完了したがゆえに進んでいる。

「このキリストの靈氣に、福音書に向かってぶつかってごらん。福音書の中にはキリストの靈氣が、愛の靈氣が澎湃^{ほうはい}としてその各頁に各節の背後から波のごとく風のごとく押し寄せて来ている。これにぶつかって読まなければ、聖書は読んでいるとはいえない。それは即ち私たちの魂をもつて全身をもつてこれにぶつかって行け」

というのが、このキリストの福音の世界です。即ち、

「愛は一切を包む」

とパウロが感激をもつて今、このコリント前書13章7節において、ある意味においてクライマックスに達している。

「一切を包み、一切を信じ、一切を望み、一切に耐える」

というこのコリント前書13章7節は、私は泣きたいくらいな文字であります！

この愛は一切を信ずる。



「神さまは成し給う、キリストは成し給う」

といって、キリストを受けとったときに、どうあってもよろしい、信ずるところのその愛を受けたところの信によって、相手のものを本当に信の世界に化していくのです。これは本当の愛であり、愛信一如であります。愛信一如である。すべてのものを信ずる。その奥底にあつてそいつを信じ荷いあげていくところの、一番のあとでもつてこれに耐え荷うと言っている。

あるいは、一切を包み、あるいは一切を愛するといつてもいい。愛は一切を愛し、一切を信じ、望む。「信・望・愛」というものが第7節でちゃんと言われている。愛は一切を包み、包みいだくということは愛することじゃないですか。包み抱くということは愛すること。愛は一切を愛し、一切を信じ、一切を望む。

「信仰と望みと愛とは」

とパウロがこのコリント前書13章の最後で言っていることは実は7節に隠されていた。

それで今度は、一切を望み、どんなことがあつても望む。信ずるに耐えないところを信じぬき、愛するに耐えないところを愛しぬき、望むに耐えないところを望みぬくものは、この愛であるという。

パウロが望むべくもあらざるときに望む。アブラハムは望むべくもあらざるときに望みました。エホバの言葉に従つて望みました。これアブラハムの希望であり、アブラハムの信仰であつた。愛は、しかしながら、もつと奥の底から本当に望むことなんです。世界が引っくり返つて、原子爆弾で世界が引っくり返つても、なお神の国はありと望んでいくことができる。全世界が曠野の如くなつても、そこからサフランの花が咲いていく。神さまの国のサフランの花は咲いていく。キリストの愛を受けた者はこれをもっている。皆さんの中に、この無限の驚くべき生命力が、キリストの生命力が来なかつたら、何をか信仰という、何をか愛という、何をか望みという。

パウロが7節で言っているこの言葉は、私たちは冥想の中に入り、そしてキリストの愛の霊気を本当に受けとったときに、

「愛は一切を望み、一切を信じ、一切に耐える」

ということは、パウロと一緒に、パウロの言葉は本当にこれ共に発する私たちの告白である。

●キリストと一つなりの世界に入る

いいですか。これは私はそこに「ぬく」という言葉を入れたいんです、日本語としては。愛は包みぬきます。信じぬきます。望みぬきます。耐えぬきます。これは終末的な世界、終末的にまで突き抜けていく。終末の世界まで。どこか途中でへたばらない。動けなくなろうが、死のうが、何でもよろしい。ぬいていく。

そういうような魂に、皆さん、この愛によつてなつたらば——家庭問題があつて困つて



いる人もこの中にあるでしょう。病気の状態が悪くて困っている人もあるでしょう。いろいろな問題でもって、皆さんここに来ていてでしょう——けれども、

「包みぬき、愛しぬき、信じぬき、望みぬく」

とパウロが言ったわけですし、私たちの方がダメであればあるほど、いよいよキリストは、と言つてくださる。これが即ち、キリストの愛は実に、愛というキリストの御霊が私たちの中に来て、これをなさしめる。パウロは決して徳目を言っているのではない。

そこで、皆さん、この角度からもう一度、このパウロのコリント前書13章の始めから読みなおしてごらん下さい。そうしたら、パウロは徳目を言っているのではなかった。愛という一つの焦点からものを言つて、ただ告白しているのであった。「そうだ、そうだ」と言つて、皆さん——このパウロの言葉は

「非礼を行わず、何々を行わず」

と徳目を言っているのではない——パウロを本当にそんな実存にキリストはさせてくださる。なんとうれしいことか。

「躓いても転んでも大丈夫だよ、そこを行けるよ」

と。そういうような、気合でもってこれが読まれていかなければ。

「アモール・オムニア・ヴィンキット」(Amor omnia vincit)

「愛は一切に勝つ」

という。一切に勝ちます。これは信じぬき、望みぬき、耐え抜きます。その勝利は私の勝利ではありません。キリストの勝利です。それは救いの勝利でありまして、一切を救いあげていくということが、すべての人が本当に救いに入っていくことが、これがキリストの本願である。これがキリストの最後の勝利である。それに向かって行くんです、キリストは。そのキリストの、すくい上げの勝利の中に私たちは入っている。そして、そのすがたは本当に十字架されつつあるところのすがたである。

「十字架される」

というとかそれでお終いのように思つてはいけませんよ。十字架されているからこそ、私たちの中に復活の生命が来るのではないですか。ですから、担いつつ、キリストにしようっちゅう担われている。荷われつつ本当に荷つていくことができる。だから、キリストの十字架においてこそ、私たちは本当に私たちに絶対不可能の世界が可能となっていく。

私たちが処していくところの一切の愛の本質は——私たちはもう説明でない——この世界を本当に身に体していくことです。それは苦しいことでない。幸いなことです。その望みはなんと素晴らしい望みだろう。その信はなんと素晴らしい信だろう。その愛はなんと素晴らしい愛だろう。これは恵みですから。その信仰もその望みもその愛もみな恵みです。皆さん、問題をもちながら、何かしらんけれども、もう突き抜けたと私は思います。い



いです。私の中にあるところのこの愛を主として言う必要はない。キリストの愛の靈氣を身に体して、そして来てごらんない。何かあたりが変わっていく。即ち、望みが実現していく。そこには事態が変えられていく。また、病は知らない間になにか軽くされていきます。御利益にあらず、觀念にあらず、このキリストの中に入っていく人は、キリストの栄光がそこに表れる。

教会がダメであってもいいです。どうかその中に本当にあつて、そしてその中において、この一切に耐えていくところのものを有つて、荷いあげていく。学校がダメでもいいです。生徒がどうでもいいです。問題は外側ではない。遠くの人にあらず、この私自身にある。この私自身においてキリストが、このキリストの愛が、実に私自身に対してキリストは一切を包んでいてくださる。また一切を信じてくださる。一切を望んでくださる。一切に耐えていてくださる。私はそのようにしてキリストに信じられ、望まれ、耐えられて、そうしていくではないですか。

皆さん一人ひとりそのように耐えられていくなら、このキリストの驚くべき、

「凡そ望み、凡そ信じ、凡そ包み、凡そ耐える」

ところの、その在り給うところのこのキリストの愛に、愛のキリストに私たちは本当にそこにおいて、なんともいえないところの生命の世界に入れられている。

「これキリストと一つなり」

という世界。キリストと苦しみ一つにするのはそこである。キリストと喜び一つにするのはそこあります。おわります。

● 祈り

お父さま、この混沌たる世界であります。日本もまた世界もさまざまな問題の何乗ばかりりません。その渦、嵐の中に20世紀の後半は今たちむかっています。それ自体は実に危機そのものであります。いつ火山の爆発の如くに人間の狡知がこれを自殺的行為にもたらしがれません。

しかし、人々の真剣な努力を祝福してください。神さま、すべてのことに対して誠の心をもって使っていくすべての人の願いを祝福してください。その祝福を本当にその人の中に、この原始福音のキリストの愛、愛のキリスト、天の真の法則、あなたの愛の聖意、これを真に化体せしめ、本当にイエス・キリストは私たち一人びとりのために悩み苦しみ、そして信じ愛し望み耐えてくださっているこの事態にぶつかり、全くキリストの中に私たちは投ぜられ——私はもうどうでもいいです——この中に入りましたならば、そこから出発します。

そして、そこから本当にイエス・キリストと共に、一切を包み、一切を望み、一切に耐え、一切を信じて、主イエス・キリスト、あなたの聖国の来ることを、



「聖国を来らせたまえ」

とは真に私たちの祈りとなつてきました。感謝いたします。

お父さま、この地上に聖国を私たちが日々に来たらせなければやまないのをごぎいます。そのようにあなたは、聖国を来たらせようとして、

「いや実に汝らの中に来たりつつある」

といつて、大いにあなたの聖国を待つていてくださるのであります。感謝いたします。そして、私たちを通して天国が現じていくことをさせてください。いや実にあなたはしてくださるがゆえに、感謝であります。

この兄弟姉妹たち、かくもキリストのものとされて、うれしくあります。一步も退きません。ただ主イエス・キリストのこの福音の中に、躓いても転んでも滑つても倒れても、互いに信じあい、互いに愛しあい、互いに忍び、互いに包んで行きます。

お父さま、どうか、かくしなれば私たちに本当の力は来ません。神さま、感謝いたします。どうか、この兄弟姉妹たち、特にここに来られなかったところの、願っているところの兄弟姉妹たちに今、驚くべき音信を彼らの魂の中に入れてやってください。そして、そこにある者も、また病にある者も同じこと、ただ主の聖名を讃えます。彼らをして聖書を開かしめてください。そして聖書にぶつかったときに、そこにキリストにぶつかり、キリストにぶつかれば、全世界一つであります。教会、無教会、カトリックも何もありません。このキリストにぶつかつてその愛をいただいて、突き抜けの神さま、真に信じぬき愛しぬき生かしめてくださるように願ひ奉る。

今、この悲願霊願が私たちの中に現成しつつあることを感謝いたします。いよいよぶつ倒れます。いよいよあなたの前に碎かれます。そのようにして生かしめてください。本当にアーメン・ハレルヤです。

帰り行くところの兄弟姉妹たち、また明日はみな散じますが、どうか、この一つのキリストを一つにして、なくてならぬただ一つのキリストにおいて、新時代に展開せしめてください。本当にあなたはそこに大きな有機体をなさしめて、あなたのエクレシヤを形成してください。全世界にキリスト者の偉大な悲願霊願が彼らの世界を包囲することができま

すように願ひ奉ります。

お父さま、そのために進んで行きます。それでなければ私たちは生きがいがありません。力がありません。神さま、感謝いたします。どうか、この兄弟姉妹たちが今、問題ができましたら、それがすつかりあなたによつて担われ、実に問題があることが逆に力であったということ、感謝いたします。本当にかくして、兄弟姉妹をキリストのものとなしたまわんことを切に願ひ奉ります。今、心からの感謝と願ひ、聖名により捧げ奉る。アーメン。

